

社会文化的側面から見る翻訳シフト分析

—ノーベル賞受賞スピーチの英日翻訳を事例に—

長谷川 泰子(大阪大学大学院生)

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

「起点テキストを目標テキストに翻訳するときに起きる小さな言語的変化」(Catford, 1965; Munday, 2008/2012/2016)と定義される「翻訳シフト」は、翻訳等価性理論の言語等価的側面を中心とした概念として扱われてきた。実際、言語間距離のかけ離れた日本語と英語の翻訳では、等価を実現するために様々なシフトを生じさせる必要がある。そもそも「翻訳シフト」という用語を最初に使用したのは J.C.Catford(1965)であるが、それ以降も翻訳シフト論は展開されている。たとえば、Vinay and Darbelnet は著書 ‘Comparative Stylistics of French and English: A Methodology for Translation’ (1958/1995)の中で、一般的翻訳方略として、7つの翻訳手順(直接的翻訳・間接的翻訳)で構成された翻訳ストラテジーを特定しており、翻訳シフトについて記述している。さらに、Bulm-Kulka(1986; 19)はテキストの結束性と一貫性のシフトにおける明示化仮説を提唱している。翻訳者が起点テキストを解釈するプロセスが目標テキストを冗長にし、この冗長性を表現するには、目標テキストで結束性の明示度を上げることで可能となるとしている。

だが、これらは翻訳の言語面にフォーカスした等価を扱ったものであり、「静的な構造レベル、ラングレベルでの対照言語学的性格を有していること、機能・状況・文化などのコミュニケーション行為としての翻訳の特徴を等閑視していること、分析例が自ら作例した理想化されたテキストを対象にしていること」(河原, 2017, p.132)などの批判がなされている。そこで、本研究では、翻訳学が社会的転回を経験した現在、翻訳の社会的側面から具体的な翻訳テキストの言表に現れている翻訳シフトを分析したいと考える。

また、Katharina Reiss が提唱したテキスト・タイプ(情報型・表現型・効力型)のちょうど中間に位置する “official speech”(「公式演説」)にあたるノーベル賞受賞スピーチの翻訳を分析対象とする。これによって、テキストレベルにおける各メディアや翻訳者のシフトの比較分析が可能となる。Reiss は、テキストレベルでの等価性を強調し、言語機能をテキスト・タイプと翻訳方略に結びつけている。(Reiss, 1977/1989; Munday, 2008/2012/2016)そして、それらのシフトを訳出物から抽出して分析することによって、翻訳の方略(ストラテジー)や目的(スコpos)を同定することが可能となる。なぜなら、翻訳者は両言語間にどのような言語やテキスト体系間の差異、社会文化的差異があるのか把握した上で、意識的あるいは無意識に、翻訳シフトを選択しているため、これらのシフトを分析することによって明らかにすることが可能となるからである。また、スコposとストラテジーの関係を考察することも可能となる。

本研究では、各メディアが提供しているノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳の事例を題材にして翻訳シフトを抽出し、語彙レベルやセンテンスレベルの言語的側面だけではなく、談話レベルやテキストレベルにおけるテキスト機能や翻訳の目的など、翻訳の社会行為的側面からも比較分析して行く。そのうえで、翻訳と社会文化的コンテキストとの関係に着目しつつ、シフトが目標読者にどのような影響を与えているのかについて考察して行く。

1.2 リサーチエスチョン

以上のことに鑑みて、3つのリサーチエスチョンを設定する。

- 1) コミュニケーション形態、言語機能、翻訳の目的(スコpos)などが、どのようなタイプの翻訳シフトを生じさせているのだろうか。
- 2) 1)について、各メディア(翻訳者)間でどのような違いがあるのだろうか。
- 3) 各メディアの翻訳者が選択したシフトが、目標読者に影響を与えているとしたら、それはどのようなものだろうか。

2. 研究の方法

本研究では、分析対象として、ボブ・ディランとカズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳を使用する。スウェーデン・ストックホルムで2016年12月10日にノーベル賞授章式が開かれた。そこで、ノーベル文学賞を受賞したが式

に欠席したボブ・ディラン(Bob Dylan)のスピーチが、在スウェーデン米国大使 Azita Raji 氏により代読された。彼はアメリカのミュージシャン(シンガーソングライター)であり小説家ではないので、ノーベル文学賞を受賞したと聞かれた人の中には驚いた人も多いと思うが、ディランはシンガーとしてではなく、詩人として受賞している。彼はスピーチの中で、シェイクスピアと自分を重ね合わせながら、これまでの自分の音楽人生を振り返っている。語彙や文法はこのようなスピーチで一般的に使用されるレベルのもので、語数は825wordsである。分析対象の英日翻訳データは、朝日新聞、日経新聞(ともに2016年12月11日付)、ソニーミュージック、NME Japan¹、Rolling Stone Japan²、BARKS³がそれぞれ提供している翻訳を使用する。

また、スウェーデン・ストックホルムで2017年12月10日にノーベル賞授章式が開かれた。そこで、ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロが、受賞スピーチを行った。長崎県出身の日系イギリス人小説家である彼はスピーチの中で、ノーベル賞創設者がダイナマイトの発明者であること、生まれ故郷である長崎が原爆投下により壊滅的被害を受けたことに触れ、この賞の精神である「平和」と彼のノーベル文学賞受賞が持つ意味を、結びつけている。語彙や文法はこのようなスピーチで一般的に使用されるレベルのもので、語数は432wordsである。分析対象の英日翻訳データは、朝日新聞、毎日新聞がそれぞれ提供している翻訳(ともに2017年12月11日付)を使用する。

朝日新聞、日経新聞、毎日新聞は一般購読者を対象としていると思われるが、ソニーミュージック、NME Japan、Rolling Stone Japan、BARKSは、ディランファンや音楽ファンを目標読者に想定していると思われる。各メディアが提供しているボブ・ディランとカズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳から翻訳シフトを抽出し、比較・分析することによって、翻訳のストラテジーとスコボスを同定し、翻訳等価性の社会等価的側面に着目して行く。これによって、スピーチというコミュニケーション形態がもつ特徴とスコボスやストラテジーの関係を翻訳シフトからあぶり出し、各メディアの翻訳者が社会文化的コンテクストを背景に生じさせたシフトが、目標読者にどのような影響を与えているのかを考察して行く。

3. 分析の結果と考察

まず、ボブ・ディランのスピーチの序論に相当するパラグラフからシフトを抽出して比較分析して行く。例として、日経新聞とソニーミュージックの例を挙げている。起点テキストをST、目標テキストはTTと表記する。

表1 ボブ・ディランのスピーチの翻訳比較

	ST	TT(日経新聞)	TT(ソニーミュージック)
1	Good evening, everyone.	皆さん、こんばんは。	
2	I extend my warmest greetings to the members of the Swedish Academy and to all of the other distinguished guests in attendance tonight.	スウェーデン・アカデミーのメンバーと、今晚ご臨席の素晴らしいゲストの皆さまに心からのごあいさつを申し上げます。	
3	I'm sorry I can't be with you in person, but please know that I am most definitely with you in spirit and honored to be receiving such a prestigious prize.	出席できずに申し訳ありません。しかし私の心は皆さんと共にあり、名誉ある賞を光栄に感じていることをご理解ください。	今回同席できないことを残念に思いますが、気持ちの上では間違いなく皆さんと共にいること、またこのような名誉ある賞を光栄に思っていることをご承知おきください。
4	Being awarded the Nobel Prize for Literature is something I never could have imagined or seen coming.	ノーベル文学賞の受賞を、想像したり予想したりすることはできませんでした。	ノーベル文学賞を受賞することは、私がこれまで想像も予測もし得なかったことでした。
5	From an early age, I've been familiar with and reading and absorbing the works of those who were deemed worthy of such a distinction: Kipling, Shaw, Thomas Mann, Pearl Buck,	私は幼い頃から、このような栄誉に値すると見なされた人たちの作品に親しみ、愛読し、吸収してきました。キプリングや(バーナード・)ショー、トーマス・マン、パール・	私は幼い頃から、(ラドヤード・)キプリング、(バーナード・)ショー、トーマス・マン、パール・バック、アルベール・カミュ、(アーネスト・)ヘミングウェイといった、そのような栄

¹ 1952年から続くイギリスの老舗音楽雑誌であり音楽メディアとして世界的な影響力があると言われている、『NME(ニュー・ミュージカル・エクスプレス)』が運営する音楽サイト「NME.com」の日本版である。

² 1967年に創刊された音楽や政治、大衆文化を扱うアメリカの隔週発行の情報誌の日本版である。

³ ジャパンミュージックネットワーク株式会社が運営する音楽情報サイトである。日本で発表されている音楽作品を邦楽・洋楽問わず紹介している。

	Albert Camus, Hemingway.	バック、アルベール・カミュ、ヘミングウェイなどです。	誉に相応しいと判断された人々の作品を読み、吸収してきました。
6	<u>These giants of literature whose works are taught in the schoolroom, housed in libraries around the world and spoken of in reverent tones</u> have always made a deep impression.	作品が教材となり、世界中の図書館に置かれ、恭しい口調で語られる文学界の巨人たちには、常に深い感銘を受けてきました。	学校の教室で教えられ、世界中の図書館に置かれ、敬意を込めて語られてきた彼ら文学の巨匠たちの作品には、常に深い感銘を与えられてきました。

一般購読者が目標読者である日経新聞では、スピーチというコミュニケーション形態の文体、結束性や情報構造などが訳文でも比較的維持されており、英語と日本語のテキスト構造の相違から生じる必然的なシフトが生じていると思われる。新聞の主たる目的である情報提供という観点から、語彙レベルで補足説明(情報の追加)のシフトが生じている。また、ディランファンや音楽ファンが目標読者であると想定されるソニーミュージックでは、スピーチというコミュニケーション形態の文体、結束性や情報構造などセンテンスレベルや談話レベルの等価には拘らず、ディランのメッセージの伝達を目的とした訳文になっていると思われる。

次に、カズオ・イシグロのスピーチの結論に相当するパラグラフからシフトを抽出して比較分析して行く。

表2 カズオ・イシグロのスピーチの翻訳比較

	ST	TT(朝日新聞)	TT(毎日新聞)
19	I am happy to receive the Nobel Sho, as I instinctively called it when, minutes after receiving my astounding news I telephoned my mother, now 91 years old.	驚きのニュースを受け取った数分後、91歳となる母に電話をかけた際、自分でも気づかないうちにそう呼んでいたように、「ノーベルショウ」を受けたことを、たいへんに幸せに思っています。	私は受賞の知らせを受けて直感的に、「の一べるしょう」と声に出し、 <u>その直後に</u> 、いま91歳の母親に電話しました。
20	I more or less grasped <u>its</u> meaning back then in Nagasaki, and I believe I do so now.	<u>ノーベル賞</u> というものが持つ意味を、幼かったあの日の長崎で直感的に悟ったのと同じように、自分が今この賞の精神を理解できていると信じています。	私は長崎にいた時、既に多少なりとも <u>賞</u> の意味を理解しており、今も理解していると思っています。
21	I stand here awed that I've been allowed to become part of its story.	そしてその歴史の一つに連なることを許されたことに、畏怖(いふ)の念を感じながらここに立っています。	<u>ここに立って</u> 、その歴史の一部になることを許されたことに感動しております。
22	Thank you.	ありがとうございました。	ありがとうございます。

彼はスピーチの序論で、5歳の時初めて、「ノーベルショウ」という名を耳にしたと語っている。また、彼はスピーチの中で、“the Nobel Sho”を一貫して使用するのではなく、“the Nobel Sho”と“the Nobel Prize”を使い分けることによって、時間や空間、ひいては異文化間の異動を表現していると思われる。だが、目標読者を一般購読者に想定していると思われる点では同じである朝日新聞と毎日新聞の翻訳において、その表現の意図の伝達に違いが見られた。つまり、朝日新聞では、スピーチというコミュニケーション形態の文体、結束性や情報構造などを比較的維持しつつ、さらに暗示的情報を明示化するシフトを選択することによって、スピーチの序論にある5歳の時の彼と、今ここ(スウェーデン・ストックホルムで2017年12月10日に開かれたノーベル賞授章式)に立っている彼を、時間的・空間的に対比あるいは異動させている。

4. 結語

これまでの比較分析結果に基づいて、先に挙げたリサーチクエスションに対し回答していく。

1) 「コミュニケーション形態、言語機能、翻訳の目的(スコポス)などが、どのようなタイプの翻訳シフトを生じさせているのだろうか。」については、テキストレベルでは、スピーチというコミュニケーション形態の文体、結束性や情報構造などは比較的維持されているが、英語と日本語のテキスト構造の相違から生じる必然的なシフトが生じていた。語彙レベルでは補足説明(情報の追加)のシフトが見られた。また、スピーチというコミュニケーション形態の文体、結束性や情報構造などセンテンスレベルや談話レベルの等価には拘らず、メッセージの伝達にフォーカスしていると思われるシフトも見られた。

2) 「1) について、各メディア間でどのような違いがあるのだろうか。」については、目標読者層や翻訳の目的などが各メディア間で異なり、この違いが翻訳者による翻訳ストラテジーや翻訳シフトの選択に影響を与えていると考えられる。つまり、一般購読者を目標読者に想定する新聞では、スピーチというコミュニケーション形態の文体、結束性や情報構造などは比較的維持されているが、英語と日本語のテキスト構造の相違から生じる必然的なシフトが生じており、比較的原文に忠実な翻訳スタイルが採用されていると思われる。また、新聞の主たる目的が情報提供だと考えられる点から、語彙レベルでは補足説明(情報の追加)のシフトが見られた。音楽ファンを目標読者に想定すると思われる音楽情報媒体では、スピーチというコミュニケーション形態の文体、結束性や情報構造などセンテンスレベルや談話レベルの等価には拘らず、メッセージの伝達を目的としていると思われるシフトが見られた。

3) 「各メディアの翻訳者が選択したシフトが、目標読者に影響を与えているとしたら、それはどのようなものだろうか。」については、一般購読者を目標読者に想定した新聞では、テキスト構造の相違から生じる必然的なシフトや新聞の主たる目的である情報提供に基づくシフトなどを除いては、スピーチの文体が保持されて、談話レベルやテキストレベルの結束性などが訳文でも維持されており、読者の視点の揺らぎが音楽情報媒体と比べて少ないと考えられる。だが、カズオ・イングロのスピーチのように、“the Nobel Sho”や“heiva”といった日本語で表現することによって、時間や空間、ひいては異文化間の異動、さらにノーベル賞というものが持つ意味までも表現しようとした彼の意図が、読者に伝えきれていない箇所も見られた。また、音楽ファンを目標読者に想定する音楽情報媒体では、テキストレベルでのメッセージの伝達を主な目的としていると考えられ、練られたスピーチの構成や文章の意図が伝えられていないと思われる箇所もあった。

本研究では、新聞や音楽情報媒体が提供する、2016年、2017年と比較的最近のノーベル文学賞受賞スピーチの翻訳を分析対象とし、テキスト構造や結束性、情報構造などのシフトが目標読者に与える影響の一端を考察したに過ぎないが、ノーベル文学賞受賞スピーチが持つテキスト・タイプ(情報型・表現型・効力型)の変容性が、どのようなシフトを翻訳者に選択させ、目標読者に影響をもたらすかについて考察する際の示唆が得られた。今後さらに、ノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳を題材にして、翻訳を社会行為として捉えた社会等価的側面から見た翻訳シフト分析を行っていく。

参考文献

- Blum-Kulka, S. (1986). “*Shifts of Cohesion and Coherence in Translation*” in Julian House and Shoshana Blum-Kulka (eds). *Interlingual and Intercultural Communication: Discourse and Cognition in Translation and Second Language Acquisition Studies*. Tübingen: Gunter Narr.
- Catford, J.C. (1965). *A Linguistic Theory of Translation An Essay in Applied Linguistics*. London: Oxford University Press.
- 河原清志(2017). 『翻訳等価再考 翻訳の言語・社会・思想』晃洋書房
- Munday, J. (2008/2012). *Introduction to translation studies: Theories and Applications*. London/New York: Routledge. (= 鳥飼玖美子監訳(2009)『翻訳学入門』みすず書房)
- Reiss, K. (1971/89). “*Text types, translation types and translation assessment*”, translated by A. Chesterman, in A. Chesterman (ed).
- Vinay, J.-P. & Darbelnet, J. (1958). *Stylistique comparée du français et de l'anglais*. Paris: Didier. translated and edited into English by Sager, J.C. & Hamel, M.J. (1995). *Comparative stylistics of French and English: A methodology for translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.